

岐路に立つ歴史家

——ロシア史学史のための覚書——

はじめに

(1) 岐路に立つ歴史家

十月革命から七年余りたった一九二五年六月一日、モスクワでは「マルクス主義歴史家協会」の設立大会が開催された。演壇に立った議長（教育人民委員代理）ポクロフスキー（Покровский, М. Н. 1868—1932）は、革命前からの数少ないマルクス主義歴史家の一人であり、革命後はその組織化に力を注いできた人物であった。すなわち一九一八年に「社会主義アカデミー」（二四年から共産主義アカデミーに改称）を発足させ、二一年には「赤色教授学院」を設置して、マルクス主義に基づく研究活動に従事する人材の養成に努めていた。だが彼の努力も、まだ期待通りの成果をうんでいなかった。演説の

冒頭でポクロフスキーは、マルクス主義歴史家は「あまりにも少く、ブルジョア史学という大海のなかにうかぶ目立たない小島にすぎない」ことを認めざるをえなかった。翌二六年一月の時点で、協会の構成員は四〇人にすぎなかったのである。

だが、このことは「ブルジョア史家」たちが革命前と変らぬ地位と名声を保っていたことを意味するわけではもちろんない。数のうえでは「ブルジョア史家」がいぜん圧倒していたこと、そして彼らが革命とその政府に対していぜん警戒的であり、敵対的でさえあったことも事実である。しかし彼らの研究基盤はすでに大きく掘り崩されていた。一九一八年から翌年にかけて、かつて「ブルジョア史学の砦」であった伝統あるモスクワ大学とレ

土 肥 恒 之

ニングラード大学の「歴史・文献学部」(Историко-филологический факультет)が廃止された。代って設けられた「社会科学学部」(Факультет общественных наук)の下におかれた「歴史学科」ではマルクス主義にかんする多くの科目が設けられた。そしてその「歴史学科」も二一年からは「社会教育学科」へと改組され、専ら高等学校のための教師＝マルクス主義者の人材養成機関へと転ぜられた。「古いブルジョア史家」は、こうして歴史教育と人材養成の場を奪われ、そして研究方法も見直しを求められていたのである。

以上のような鋭い対立関係をはらみながらも続いてきた新旧の歴史学の「平和的な共存」も、一九二〇年代末にマルクス主義歴史家の「勝利」によって決着がつけられた。だがその「勝利」は、「ブルジョア史家」たちの大量追放という暴力的措置によって辛じてもたらされたのである。この小さな覚書は以上のような見通しのもとに、革命前にすでにその研究活動によってアカデミズムに確固たる地位を築いていた三人の著名な「ブルジョア史家」に焦点をあてて、その著作と波乱にみちた生涯の概略をたどることにある。その三人とは、キゼヴェツテル

ル (Кизевтер, А. А. 1866—1933)、『ボユスロフスキー (Богословский, М. М. 1867—1929)』そしてチエ (Тяе, Ю. В. 1873—1943) である。彼らはいずれも批判者となった先のボクロフスキーと同世代であり、いわゆる「クリュチエフスキー学派」に属する歴史家であった。もとよりクリュチエフスキー (Ключевский, В. О. 1841—1911) の下で学んだ歴史家は少なくないが、十七—十八世紀ロシア史の研究水準は、この三人によって一挙に高められたのである。

— キゼヴェツテル

アレクサンドル・キゼヴェツテルは一八六六年五月、モスクワに生まれた。だが役人であった父の仕事の関係で一家はオレンブルグへ移住した。キゼヴェツテルは幼少年期のほとんどを中央から遠くはなれた地方の都市ですごしたのである。一八八四年九月、モスクワ大学の歴史・文献学部に入學した彼は、クリュチエフスキーのロシア史、ヴィノグラードフ (Виноградов, П. Г. 1854—1925) の世界史 (西洋史) を聴講した。(クリュチエフスキーについては何度も言及するが、「クリュチエフ

スキー学派」の若い歴史家たちにも強い影響力を及ぼしたヴィノグラードフについては末延三次氏の「評伝」を参照願いたい。またクリュチエフスキーの最初の弟子であり、当時すでに専任講師であったミリュコフアリウアドツェント（Милуков, П. Н. 1859—1943）のロシア史学史にかんする特殊講義も熱心に聴いた。ミリュコフは学生たちを自分のつつましい書齋に招いて授業をした。キゼヴェツテルにとって忘れ難い体験であった。

キゼヴェツテルは、こうして大学の講義にでる他は、残りの時間のすべてをルミャンツェフ博物館の公共図書館（旧レーニン図書館）で読書に専心した。大学を卒業した彼はクリュチエフスキー指導下のロシア史講座に残り、修士号の取得の準備に入った。モスクワのいくつかの高等教育機関でロシア史を教えながら、修士の課程試験をパスした。一八九八年、三十二歳で彼はモスクワ大学の専任講師となったのである。

修士論文のテーマは『十八世紀ロシアのポサード共同体』（都市内の商工地区）についての法と組織だけを分析して、ポサード共同体の社会的諸関係については空

白のまま残されていた。論文は第一部でポサード共同体の住民構成を、第二、三部で共同体に課された「勤務」と「チャグロ」を、そして第四部で自治の問題を分析した。キゼヴェツテルは、こうしてポサード共同体という社会組織の実際の活動、そしてその活動が行なわれた社会的媒体に関心を向けた。その結果として、共同体の具体的な規模と構成、税負担とその徴税組織、あるいは連帯責任や「階級闘争」の問題についてさえ言及されることになったのである。

キゼヴェツテルは、もとより「都市の社会史」を書こうとしたわけではなかった。彼の主要な関心は都市（社会）と国家との関係いかにあった。言いかえると、十八世紀の「専制国家」とロシア人の生活の現実に横たわる「深い溝」に注意が向けられていたのである。そして彼が引きだした結論は、次のようなものであった。「一方で、ポサード共同体は、この時期を通してそれが古モスクワ公国にあったのと同じ商工業担税民の共同体のままであった。他方で、ピョートル一世の時代から政府はこの古い皮袋に外国から持ってきた〔新しい〕酒を注ぎはじめたのである」。エカテリーナ二世は、ポサードと

いう古いチャグロ組織を基礎にして、西欧のそのような第三身分を創り出そうと夢みた。だが高度な文化的課題は実現されず、ポサードのチャグロは以前よりも堪えがたいものとなった。「結果としてポサード住民の意識には一つの結論だけが残った。すなわち政府の保護ははなはだ高くつくこと、生活はより苦しくはなっても、決して良くならなかったことである」。

キゼヴェツテルの論文は、こうして十八世紀ロシアの「第三身分」についての最初の研究であった。この研究のために「私は七年間ほとんど毎日、朝九時から昼の三時まで古文書館にすわり、記録の抜き書きをし、山のようのために。その処理のために約二年間を要した」と書いている。審査の結果、学位が授与され、八百頁をこえる大部の論文は一九〇三年に刊行された。

キゼヴェツテルの著作は、端的にいつて師であるクリュチエフスキーの命題(「国家は太り、民衆は衰弱する」)を十八世紀の都市を題材にして検証したもの、と言うことができるだろう。したがってポサードの社会経済的問題への彼の関心はきわめて一面的であった。チャグロ、国家の租税には十分に多くの頁がさかかっている、

都市住民自身の商工業活動にはほとんど触れられることはなかった。そのテーマ設定、したがって課題意識はあきらかに時代に制約されたものであったのである。

キゼヴェツテルにおいて修士論文にはじまる学問研究が生活において中心的な位置を占めていたことに疑いはないだろう。彼は十八世紀ロシア、とりわけエカテリーナ二世の時代に生涯一貫して関心をもちつづけた。だが他方で、一九〇三年から彼は雑誌『ロシア思想』の編集に加わり、〇五年からは『ロシア報知』でも仕事をはじめた。すでに早い時期から社会運動に強い関心をいだいていたキゼヴェツテルにとって、こうした仕事への参加は、彼を多くの社会運動家、政治家、そして作家たちに近づける契機となった。また芸術、とりわけ舞台芸術は彼が深く愛好したところであったが、演劇家たちの広いサークルとの交際もはじまった。そして二十世紀初頭、ロシアは政治的激動の時代に入っていたのである。

一九〇五年の革命はキゼヴェツテルを政治活動に大きくまきこんだ。彼は十月のカデット党の創立大会に参加し、翌年一月の大会では党の中央委員に選ばれたのである。持ち前の雄弁でもって、彼は政治集会で積極的に発

言し、全国をまわって党のプログラムと課題について講演した。こうしてカデット党の指導者の一人となって多忙な政治活動に入ったキゼヴェツテルであったが、それは国が困難な時期にある時、目覚めた人間は誰しもその再建に貢献しなければならぬ、とする強い使命観からくるものであった。彼の妻も「サーシャは自分を社会活動家とみなしていない」と書いている。だがこうした活動には彼が向いていなかったにも拘らず、というわけではなかっただろう。彼の雄弁は人を動かす力があったのである。

一九〇九年、キゼヴェツテルは博士論文『エカテリーナ二世の都市令。歴史的注釈』を提出した。論文は『ポサード共同体』の続篇をなすものだが、ここでは一七八五年の「都市令」そのものに限定して、その「歴史的注釈」が試みられた。すなわち女帝エカテリーナは当初どのように考え、いかなる影響下に法令が形成され、そして法のイデーはどのように実現されたか、等々について著者キゼヴェツテルは、一七八五年法令の草稿やプランの探索からはじめ、そしてこの重要な法のいくつかの源流を確定した。だが問題の性格上、都市の社会経済生活

を照らしだす諸史料の利用は、前者と較べるならば著しく少ないことは否定できない。この論文で博士号ドクトルを授与されたキゼヴェツテルは、モスクワ大学での講義、すなわち十八、十九世紀ロシア史の特殊講義を続けるとともに、歴史学の理論や方法の問題にも関心を寄せていった。一九一〇年に入ってからである。当時すでに七〇歳にさしかかり、病気がちであった師クリュチエフスキーがロシア史講座を指導する後継者としてキゼヴェツテルを推薦した。「ロシア史にかんする二冊の主要な業績と二十一年間に及ぶ教育活動、そのうち十一年間はモスクワ大学に献げられた」研究・教育者キゼヴェツテルをクリュチエフスキーは推したのである。加えてキゼヴェツテルは弟子たちの誰よりも師匠譲りの、といってもいい巧みな講義術と文体をもっていたし、そして政治的見解も近かった。

だがこの人事は通らなかつた。文部大臣カッソがこれを承認しなかつたのである。そしてほとんど同時に、キゼヴェツテルをその後長く大学から遠ざける事件がおこつた。大学自治の事実上の消滅、大学当局の無力、そして文部大臣に抗議する学生の集会がもたれた。大学の教

授も講師もこれに加わり、そして多くのものが大学を去った。そのなかにキゼヴェツテルもいたのである。クリュチエフスキーも一九一一年五月亡くなり、講座を受け継いだのは彼よりも一つ年下のボゴスロフスキーであった。

キゼヴェツテルは、こうしてモスクワ大学を離れ、その後はおもにシャニャフスキー名称国民大学(一九〇八年創設)が教育活動の舞台となった。『歴史の概要』(一九二二)、『歴史の反響』(一九一五)という近代ロシアにかんする二冊の論文集も出版された。だが間もなく勃発した第一次大戦を契機として、ロシアは再び革命の時代をむかえた。二月革命がはじまった時、カデット党员であるキゼヴェツテルの政治活動は十分に積極的であった。彼は新聞などの刊行物において立憲議会主義の確立を説いた。彼によると、君主制は政治発展の移行的なカテゴリーの一つであり、いつも憲法によって制約されていなければならなかった。直截に言うところ、それは国家体制の不可欠の属性とは考えられていないのである。彼がニコライ二世の退位を国の歴史における「偉大な日付」、「専制からの解放」と評価したのもこうした理由からで

あった。

他方で、キゼヴェツテルはポリシェヴィズムとその政治プログラムを非難しつつつづけた。そのデマゴギー的な、そして独裁的な方法は「自由」にとっては危険と映ったからである。社会主義の理想は、彼には「現実的ではなく、純粹にアカデミックな問題」であった。また戦争でドイツが勝利した場合に、ロシアは十六世紀のモスクワ国家のように海も産業もない状態に戻りかねないことを危惧した。したがって彼は勝利の日まで戦争の遂行、という方針を支持したのである。

ロシアの現実を革命的手段で改造することに反対し、十月革命後はその不承認の立場を貫くカデット党中央委員キゼヴェツテルの存在は、政権を奪取したポリシェヴィキには危険な存在であった。彼は厳しい監視をうけ、そして一九一八年から二一年にかけて三度逮捕された。二度目の逮捕の時、彼の妻がボクロフスキーに援助を求めたが無駄であったという。そしてついに最後の時がきた。二二年八月、キゼヴェツテルの自宅が搜索され、軟禁された後に国外への強制追放の処分をうけたのである。彼と家族は、運命をともしするモスクワの教授グループ

とともにペテルブルグに集合した。九月末、彼をのせた船はロシアを離れた。キゼヴェツテルはその時、五十七歳であった。

亡命者にして歴史家キゼヴェツテルの活動の新しい舞台はブラハであった。当時チェコスロヴァキアにはさまざまな経歴をもつ約二二、〇〇〇人のロシア人亡命者がいたとされ、大都市ブラハにはすでにロシア人学者によって設立された幾つかの研究機関が存在していた。もしパリがロシア人亡命者の政治的首都であったとするならば、ブラハはいわば「学問の首都」であり、この共和国の最後の日までそうであった。二三年一月にブラハに到着したキゼヴェツテルは、さっそくこうした機関に所属するとともに、二五年四月には仲間とともに新しく「ロシア歴史協会」を設立した。協会は帝政下でつづいてきた「ロシア歴史学派」の伝統の保持と若い世代へのその継受を狙いとしていた。初代の会長は著名な歴史家シユムルロ (Шумро, E. Ф. 1854—1934) であったが、キゼヴェツテルがその後を継いだ。協会では最初の九年間に一七〇回の報告が行なわれた。年平均二〇回になるが、そのうち半数はロシア史固有のテーマであった。その多

くは論文あるいは要旨として協会の『論集』にのせられた。キゼヴェツテルの活動はまさに矚目すべきものであり、十年間に一八〇本をこえる小論、短評、書評が発表された。またしばしば講演をおこない、その足はベルリンやベオグラードにも向ったが、いつも人気を博した。だがブラハ時代の最大の著述は二九年に出版された『二つの世紀の狭間で。一八八一—一九一四年の思い出』という追想の書であった。亡命の地にあつて、キゼヴェツテルが祖国ロシアによせる郷愁ノスタルジーは切なるものがあつた。だが彼は、ついにロシアに帰ることはなかつた。三三年一月、キゼヴェツテルは十年間の亡命生活のうちブラハで世を去つた。

二 ボゴスロフスキー

ミハイル・ボゴスロフスキーは一八六七年三月にモスクワに生まれ、終生そこを離れることはなかつた。この点ですでにキゼヴェツテルと対照的であつたが、一八八六年に入學したモスクワ大学の歴史・文献学部でのクリュチエフスキーの講義についての印象も両者のあいだには違ひがあつた。師の巧みな、芸術的ともいふべき講義

術に感銘し、みずからもその資質を備えていたキゼヴェツテルが文句なく賞賛の言葉をのこしているのに対して、ボゴスロフスキーはもう少し冷静な眼でながめていた。

すなわち彼もまた、師の講義における言葉の明晰さ、比較と形容辞的確さ、あるいは抑揚などその芸術的美しさを指摘した。だが、それはクラシック音楽のすぐれた演奏とそのあとに生まれる喜びと高揚した気分のような性格のものであり、クリュチェフスキーにとって必要なのは、自分が引きだした「結論を受け身に受け入れる」講義室であって、そこでは彼はいわば独裁者であった、というのがボゴスロフスキーの見方である。これとは対照的なのは、ヴィノグラードフのセミナーであった。そこは医学生が外科医の教授の指導の下に手術に立会うように、歴史学の方法を学ぶいわば実験室であった。ボゴスロフスキーは、後年このセミナーを「最大の感謝をもって」語ったのである。

ボゴスロフスキーは、ともあれ一八九一年に卒業し、クリュチェフスキーのもとで修士号の取得の準備に入った。九五年に試験にパスした後、九八年からモスクワ大学の専任講師として研究教育活動がはじまったのである。

九七年には雑誌『ロシアの富』に最初の論文「一七六七年のエカテリーナ委員会への貴族の要望書」が発表されたが、修士論文のテーマは『ピョートル大帝の地方改革。一七一九—一七二七年』であった。

まずピョートル改革についてのボゴスロフスキーの見解を簡単にみておこう。ピョートル大帝の改革は、彼によると、何よりも十七世紀から十八世紀はじめにかけて「ヨーロッパ共通の現象」であった「全般的福祉」、合理主義、絶対主義的並びに「規制的な」行政国家のイデーに導かれていた。自己の臣民をあらゆる後見によって包みこみ、生活のあらゆる側面に干渉する。生産の細部まで規制し、例えばラシャ布の織幅まで制定する。家計における過度な支出を禁止し、社会的娯楽さえ組織する。これら一連の政策によってピョートル政府は旧来の慣行ときびしくたたかい、容赦なく根絶しようとしたが、それは先のイデーに導かれていたというわけである。

以上のようなピョートル改革論は、すでに十年前前に発表されていたミリュコフの記念碑的労作『十八世紀第一・四半期の国家経済とピョートル大帝の改革』(一八九二)で提出されたテーゼと真向から対立するものであ

った。ミリュコーフは「改革者ぬきの改革」をとえ、改革を偶然的かつ盲目的なものとみなしたからである。

ミリュコーフに対峙して、そして自分の師であるクリュチュフスキーにも対峙して、ボゴスロフスキーは更に次のように展開した。「改革は、その最後の年月においてスウェーデンとのたたかひのための力と手段のたんなる組織化、というよりも更に広い課題を追求した」と。

改革は「時代の精神」を刻印されており、自覚的な目的をもっていったという見解にたつて、ボゴスロフスキーは一七一九年の地方改革とその失敗の諸原因について歴大な事業資料に依つて説明をすすめた。クリュチュフスキーの他の弟子たちと同じく、先行の諸研究が地方諸機構についての法だけを調べて、実際の活動まで立入って検討せずに暗闇に残した、と批判した。ボゴスロフスキーは、まず立法者の意図がどうであったか、そして実際には改革はどうすすめられ、どう変化せざるをえなかったか、に関心を向けたのである。こうした問題の設定は、これまで僅かしか引かれていなかった歴大なアルヒーフ史料を明るみに出すこととなった。その結果、ピョートル治世末期の民衆にとつての租税、とりわけ人頭税の重

圧、それに対する抗議行動、あるいは地方貴族の勤務忌避などについての多数の貴重な証言が掘り出されたのである。

一九〇二年に提出されたボゴスロフスキーの修士論文は師のクリュチュフスキーによつても高く評価され、『ウヴァーロフ賞』が授与された。ボゴスロフスキーは、その後もしばらくは十八世紀に関心を集中させ、多くの論文、概説を書き、そして小冊子を發表した。例えば『十八世紀前半における貴族の日常と道徳』(一九〇四)、『ロシアにおける上位権力の歴史から』(一九〇五)、『一七三〇年の立憲運動』(一九〇六)、などが続々と刊行されている。モスクワ大学では十八世紀ロシア史にかんする特殊講義とゼミナールを担当したが、その他モスクワ女子高等学院(大学に相当)、セルギエフ・ポサードにあるモスクワ神学大学アカデミでも講義とゼミナールを受けもつた。

一九〇九年、ボゴスロフスキーは博士論文『十七世紀のロシア北部における地方自治』を提出した。十七世紀の国有地の郷とその農村住民についての全面的な記述であり、ここでも歴大な資料に基いて北部の共同体の具体

的在り方、地方自治への住民の参加、などの基本的問題が細かく、そしてあざやかに分析されたのである。ボゴスロフスキーによると、十七世紀は転換期である。すなわち動乱時代を境にロシア史は専制・ゼムスキー的体制から中史集権的なそれへの発展がはじまる。言い換えると近代は地方機関の衰退によって特徴づけられているわけだが、ここでも彼の第一の関心は地方自治、ゼムストヴォと国家との相互関係を説明することにあつたのである。

翌一九一〇年にボゴスロフスキーは定員外教授に昇任したが、その年の五月に亡くなった師クリュチエフスキーの講座を継いで正教授のポストに就いた。すでに指摘したように、クリュチエフスキーは死を前にして後をキゼヴェツテルに託す旨「遺言した」が、文部大臣はこれを認めなかった。そしてキゼヴェツテルは大学を去った。ボゴスロフスキーも政治権力の介入を許しがたく思っていたが、講座に残り、そしてクリュチエフスキーの後継者となつたのである。この問題について、のちにボゴスロフスキーは次のように書いている。「当時、私は〔大いに〕残り、キゼヴェツテルの退去のために空になつた

講座につき、まったく正しく行動した。そして甚だ良くなした。もし私がそれを占めなかったならば、そこにドヴナル＝ザボリスキー [Довнар = Запольский, М. В. 1867—1934] が誰か他のもっと劣つたものが座つたであろうし、そしてそこで自分たちの学派をばびこらせたであろう。私はヴェ・オ・クリュチエフスキーという我が学派の長の伝統をモスクワ〔大学〕の講座のために守つた。それを純粹さにおいて守つたのであり、これを誇る権利をもっている」。

一九一〇年代、ボゴスロフスキーの研究教育活動はその頂点に達したかにみえた。『十七世紀の北部ロシアにおける地方自治』の第二巻が一二年に刊行された。大学のゼミナールでは、のちの「ソ連史学」の指導的歴史家となる若い学生が順調に育っていった。その一人であるドルジーニン (Дружинин, Н. М. 1886—1986) は『思い出』のなかで「エム・エム・ボゴスロフスキー教授の教育的才能は、いっそう強くゼミナールの時間にあつた。古代ロシアのテクストに素晴らしく通暁していた彼は、豊富な歴史文献を引きこみながら、そしてまた重要な社会学的結論へと導きながら、法規範を全面的か

つ鋭く分析することができた」と書いている。またボゴスロフスキーはモスクワ大学に附設されていた「歴史協会」の再建に力を尽くした。一六年に雑誌『歴史紀要』が刊行され、協会の運営は軌道にのりつつあった。同じ年、彼は伝統ある帝国考古学委員会の議長に推されたが、それを断っている。「私にはイコンはまだはい、私はまだ働かなければならない」と。

ボゴスロフスキーは、ようやく五十歳になるうとしていたが、彼の仕事においてますます大きな位置を占めるようになったのはピョートル大帝の伝記研究であった。改めて指摘するまでもなく、ピョートル大帝とその時代は、彼の歴史家としての形成期からの研究対象であり、修士論文をはじめとしてすでに多くの著述があった。だがボゴスロフスキーはこれに満足することなく、大帝の一日一日の行動を追うという気の遠くなるような細かく、遠大な作業に入ったのである。みずから「ベトリイダ」と呼んだこの仕事は未完のまま終わったが、そうした仕事に従っている時間だけが彼に深い喜びを与えたのである。十月革命は、言うまでもなくボゴスロフスキーの研究環境を大きく変えた。キゼヴェツテルのような「社会活

動家」でなかった彼は激しく動く事態を見守るだけであったが、ボゴスロフスキーを筆頭とする「新しい歴史学」の組織化がはじまると、まともにその荒波を蒙らざるをえなかった。彼は二五年四月までモスクワ大学教授にとどまったが、伝統ある、みずからもそこで育てられた歴史・文献学部は「社会科学部」に改組されてしまった。

そして彼は学部附属の歴史研究所でロシア史部門の責任者ということになった。新しいマルクス主義歴史学は、まだ決定的な人材不足の状態にあり、「古いブルジョア史家の良き側面」を利用せざるを得なかったが、ボゴスロフスキーが協力的であったかどうかは不明である。だがピョートル大帝の伝記研究は中断されることはなかった。二四年に新設された「ロシア社会科学研究所協会」の歴史研究所は二〇年代後半の歴史の中核となったところだが、その『論集』第一巻（一九二六）には若い「ソ連史家」とともにボゴスロフスキーも「一六九八年のイギリスにおけるピョートル大帝」を寄せている。

一九二九年四月、ボゴスロフスキーは重い心臓病のために死亡した。六十三歳であった。十月革命後、ボゴスロフスキーの研究環境は何度か変更され、そして劣悪化

した。だが仕事に對する彼の情熱は衰えなかった。ピョートル大帝の伝記研究は、まだ完成には程遠かったが、のちに五巻に整理されて刊行された(一九四〇—四八年)。一九七四年に歴史家ボゴスロフスキーについてはじめて本格的な論文があらわれた。その著者である中世史家チェレブニン(Черепнин, Л. В. 1905—1977)は、ボゴスロフスキーの「政治的保守主義」を指摘しながら、次のように書いた。「一九一七年の十月以後、……自己の学問的並びに實際的な仕事において、彼はますますソヴェトの現実と近づき、新しい社会の積極的な活動家となった。そしてもし早い死がなかったならば、彼は恐らく旧来の政治意識の完全な転換を体験したのであろう」。ボゴスロフスキーは二七年にパリで開かれた歴史会議に出席し、また翌二八年にはドイツの東欧研究協会の招きで、ソ連歴史家集団の一員としてベルリンを訪問した。こうした点から「ソ連史家ボゴスロフスキー」の誕生を予期しても、まったく有りえないことではない。だが事態は別の方向をとったのである。

ボゴスロフスキーが亡くなった時、『カザン大学紀要』にベ・イ・スイロムヤトニコフの追悼記事ネクロログが発表された。

だが管見の限り、この僅か三頁足らずの記事が唯一のものであり、記念論文集もちろん出版されることはなかった。チェレブニンの先の予測からするならば、大歴史家の死に對するこうした扱いはいかにも冷たく、誰しも首をかしげざるを得ないだろう。だが、ボゴスロフスキーが亡くなった一九九年四月に歴史学界はいかなる状況におかれていたのか。この点を想起する時、この疑問もおかた了解しうるだろう。

一九三〇年一月、レニングラード大学教授で「ブルジョア史家」プラトリーノフ(Платонов, С. Ф. 1860—1933)は、ニコライ二世に関する文書管理にかかわる「陰謀」のために逮捕された。一般に「プラトリーノフ事件」と呼ばれているこの事件は、実は彼個人にかかわる問題ではなかった。二八年十月に「彼の学派」の一人が逮捕されたのを皮切りに、彼の教えをうけた歴史家たちが次ぎつぎと犠牲になった。そしてその波はモスクワ大にも及んだ。こうして三一年までにレニングラードとモスクワをあわせて一一五名(あるいは一三〇名という説もある)の歴史家とその関係者が逮捕された。裁判によって多くは数年間の流刑の処分をうけ、ただちに執行

された。プラトリーノフは流刑地のサマラで三三年一月に亡くなったのである。

最近、この「プラトリーノフ事件」(あるいは「四人のアカデミー会員事件」とも呼ぶ)を精力的に調査しているヴェ・エス・ブラチョフによると、この事件は実際は「プラトリーノフ・ボゴスロフスキー事件」と呼びうるものであった。すなわちプラトリーノフの逮捕後八カ月のうちに、すでに指摘したようにレニングラード大学の歴史家にモスクワ大学の歴史家グループが加わった。ボゴスロフスキー自身はすでに亡くなっていたが、「当時彼はプラトリーノフに近かった」。そのことが当局をして両大学の歴史家たちを同じ組織の枠内で関連づける可能性を与えた。故ボゴスロフスキーは、プラトリーノフとともに「神話的な『自由ロシア再興のための全国民同盟』の組織者、鼓舞者」とされ、「プラトリーノフ事件」は「プラトリーノフ・ボゴスロフスキー事件」へと転化された、というのがブラチョフの見解である。

この新しい見解には史料が示されておらず、「事件」の解明にはこんごをまたなければならぬ。大歴史家ボゴスロフスキーの死去に示された冷遇はあるいはこれと

関連しているかも知れない。だが彼はこの歴史学界の「大粛清」に直接巻きこまれる前に世を去った。そしてその犠牲になったプラトリーノフは未発表におわった追悼文のなかで、ボゴスロフスキーが「饒舌とせわしなさを嫌っていた」こと、彼のなかにはいつも抑制されたものがあり、若干閉鎖的でさえあった、とその人柄を回想している。ボゴスロフスキーにとって生きる意味は仕事にあり、しかも彼は「雑役夫のように働く」ことをよしとしたのである。

三 ゴーチエ

ユリー・ゴーチエは一八七三年六月にモスクワで生まれた。名前から推察されるように、彼の曾祖父がエカテリーナ二世の移住の呼びかけに応じてやってきたフランス人であった。父方の家庭ではフランス語での会話が日常であったという。後年彼は二つの古典語の他、四、五つの近代語をマスターしたが、こうした才能は家庭環境によっても養われたとみられる。

一八九一年に、ゴーチエはモスクワ大学歴史・文献学部に入學してクリュチエフスキーとミリュコフのもと

でロシア史を学びはじめた。クリュチエフスキーの講義は、彼の先輩たちと同様に「ロシア史への特別の関心」をよびおこしたが、歴史家としてのゴーチエの形成に最もつよい影響を及ぼしたのは、むしろミリュコーフのゼミナールであった。彼はミリュコーフの指導の下に卒業論文のテーマとして、十六世紀モスクワ国家の南部国境の防衛、を選択した。この他にゴーチエはヨーロッパ史、古代史、そしてとりわけ考古学にも関心を寄せ、発掘調査にもしばしば参加した。この経験は彼の後半生において有益な作用として働くのである。

大学を卒業したゴーチエは、モスクワの高等教育機関、司法省、ルミヤンツェフ博物館などで働きながら修士試験の準備をすすめた。一九〇〇年に試験にパスし、〇三年からモスクワ大学の専任講師として学部スタッフに加わったのである。修士論文は『十七世紀のモスクワ地方——モスクワ・ルーシの経済生活の歴史研究の試み——』であり、〇六年に提出された。「十七世紀ロシア」。これは「古ルーシ」と呼ばれる旧体制が最も完全な発展をみせた時代として、そしてまた近代的発展が萌芽した時期として、たえず歴史家の注意をひきつけてきた。ゴ

ーチエの論文は、なかでもこれまで余り研究されてこなかった「十七世紀の農村住民、土地所有関係、そして農業の歴史」を対象とするものであった。そしてこのテーマの選択には、もう一つの動機が働いていた。クリュチエフスキーの弟子たちの間では最も若い彼は、自分を師の仕事の継承者として考えていただけでなく、自分のすぐれた先輩たちの仕事のあとを継ぐ役割をも引きうけようとした。彼の修士論文のテーマは、ロシコーフ(Pokrov, H. A. 1868—1927)の『十六世紀モスクワ・ルーシの農業』(一八九九)を継承するものと自覚されていた。こうしてゴーチエは動乱時代の社会経済的結果を分析した。因みに彼のこうしたテーマ設定は博士論文でも踏襲されたのである。

さて『十七世紀のモスクワ地方』は、土地台帳と調査簿という基本史料を駆使した経済史研究、彼の言葉では「経済的諸条件の歴史」の研究であった。この研究のために彼は約四年間、ほとんど毎日を文書館で関連史料を集め、集めた史料を更に表にまとめる、という作業に没頭した。その結果、モスクワ地方が世紀はじめの外国軍の侵略と内乱によってうけた危機から脱した、という

重要な結論をひきだした。そこでは約一世紀間の人口移動、農業システム、農民分与地の規模とその変化、作人と裏庭人などの在り方について興味深い諸史料が示された。こうしてゴーチエの主要な関心は「国家経済」ではなく「国民経済」に向けられたのである。

一九一三年、博士論文『ピョートル一世からエカテリーナ二世までの地方行政の歴史』が発表された。ゴーチエは序文で、この問題がこれまで「学者が特別な意欲と注意でもって」取り組んできた「お気に入りテーマ」であること、そしてこの論文が「ボゴスロフスキーが自分の『ピョートル大帝の地方改革』が立ちどまった時点から始められる。私の仕事は、こうして今挙げた著作の継続をなさねばならない」と述べている。内容は一七二七年の地方改革法の分析から始めて、県知事と地方長官プロトコルの勤務、とりわけ実際の活動状態の解明、更には人的構成などから成っており、十八世紀中葉の地方行政、その旧態依然たる故縁が豊富な史料の裏付けによって説得的に展開されている。

ゴーチエの結論は、「ピョートルの継承者たちの時代に形成された十八世紀の地方機構は、ピョートル改革に

対する典型的な反動としての古いモスクワへの復帰とみなさなければならぬ」という点にある。すなわちピョートル以後のロシアにも「規則的国家」という改革者によって植えつけられた種子から生まれた妖怪がさまよっていたが、この妖怪の向うには、しばしば往時の因襲、新しい形式には無縁で、その代りロシア人にはより理解できる、慣れ親しんだ古いモスクワの慣習が見分けられ「た」のである。

ゴーチエは、こうして二つの大著によって革命前にすでに歴史家として確かな地歩を築いていた。一九一五年四月に彼はモスクワ大学の定員外教授となった（正教授になったのは一七年九月であった）。だが間もなく革命が勃発した。ゴーチエは一時期カデット党に近づいたことはあったが、どの政党にも属することなく、そして反ポリシエヴィズムであった。十月革命はロシアの道德的並びに精神的危機として理解された。彼の政治的、社会的見解は、この点でアカデミズムに生きるインテリに典型的なものであった。

モスクワ大学歴史・文献学部の解体（一九一八年）とともに、ゴーチエは考古学の課程での教育活動に従事し

た。すでに述べたように、考古学は彼にとって長年にわたる関心領域であったが、革命は思いがけずその教育機会を与えたのである。彼は伝統ある帝国考古学委員会の改組によって生まれた「物質文化史アカデミー」のメンバーに加わり、多くの発掘調査にも参加した。彼の考古学研究の成果は二五年と三〇年にそれぞれ著書として刊行されたのである(『東欧物質文化史概要』、『東欧における鉄の世紀』)。二七年に勤め先の「物質文化史アカデミー」が「ロシア社会科学研究所協会」に併合された時、ゴーチエもまたそこへ移った。だが革命後ともかくも続いてきた「平和的共存の時代」も終りをづけようとしていた。「できたての」マルクス主義歴史家が徐々に主要ポストを占めはじめる一方、「ブルジョア史家」のバジがはじまったのである。

一九二八年十月にレニングラード大学のロジエストヴ・エンスキー(Рождественский, С. В. 1868—1934)が逮捕された。これを契機にしてザオセルスキー(Заозерский, А. И. 1874—1941)などのプラトリーノフ学派の歴史家たちが次々に捕えられた。すでに指摘したように、この事件は君主制の復活計画とかかわる陰謀とされ、そ

の主犯がプラトリーノフとされた。この点から「プラトリーノフ事件」、あるいは他に逮捕された他の三人のアカデミー会員を含めて「四人のアカデミー会員事件」とも呼ばれるが、一一五人の逮捕者をだしたこの事件は、まったくの捏造であった。だがゴーチエもモスクワの秘密組織の長とみなされ、三〇年七月逮捕されたのである。

ゴーチエがどこへ流刑され、五年もの間どのような条件下で暮らしたのか正確なことは依然として不明である。恐らくは極北のウフタ・ペチョラ収容所か、あるいはプラトリーノフと同じサマラに流されたかのいずれかだろうと推測されている。だが皮肉なことに、この間に中央の方針は急転回をみせた。三二年に亡くなったマルクス主義歴史家の大御所ボクロフスキーに対する批判がはじまったのである。そのポイントは二〇年代に追求された「ソ連邦史」、極端な場合には「ロシア史」という概念は反革命的として排斥される程に強い反ショーヴィニズムが一転して放棄された点にあった。国際舞台で強力な国家を形成するうえで愛国心を喚起する教育やその高揚が必要だ、という政治方針にしたがって過去のロシアに眼が向けられたのである。学校における歴史カリ

キュラムが復活し、ロシア史の新しい教科書編纂が緊急の課題とされた。歴史家は再び「ロシア史」に従事することを求められた。こうした一連の動きのなかで、とりわけ象徴的な出来事がモスクワ大学とレニングラード大学における「歴史学部」の形成、否その復活である。一九三四年五月のことである。

歴史学をめぐるこうした新しい状況は流刑中の、まだ生存していた「古いブルジョア史家」の運命にも影響を及ぼした。プラトールノフやリュバフスキー (Лубафский, M. K. 1860—1936) などは流刑先で亡くなったが、まだ生存していた他の多くの歴史家が連れ戻され、そしてしばしば逮捕前と同じポストを得て、再び仕事にとりかかったのである。そしてゴーチエもモスクワへ戻った。彼を迎え入れたのはモスクワ大学ではなく、その歴史部門を含んだ施設である「モスクワ歴史、哲学、文学研究所」(一九三二—四一)であった。三七年には、すでに三十年以上もまえに出版された彼の博士論文『十七世紀のモスクワ地方』の第二版・改訂版がでた。これは論文を「技術的に」三分の二程度に縮小したものである。ゴーチエは、こうして完全に「名誉回復」した。三九年に

は科学アカデミーの正会員に推されたのである。また同じ年、彼はモスクワ大学で特殊講義(一九二五—九六年のロシア帝国)を行っている。

歴史家ゴーチエの最後の仕事は、一九三九年にでた高等教育機関向けの歴史教科書『ソ連邦史——最古代から十八世紀末まで』第一巻への執筆であり、そこに十八世紀のロシアを中心に多くの章を執筆した。これは、「マルクス主義の立場から書かれた封建制期のソ連邦史の最初の教科書」であった。更に四一年には『地方行政史』の第二巻が刊行されたが、すでに指摘したように、これは二十年前に完成していたものであった。

一九四三年十一月、第二次大戦(大祖国戦争)のさなか、ゴーチエは七十歳の生涯を閉じた。「ソ連史家ゴーチエ」には多くの追悼文が寄せられた。

むすびに代えて

ペレストロイカ、そしてソ連邦の解体に至るこの十年足らずに生じた政治的激変にもなつて、ロシアの歴史学界にかつて存在したタブーや規制はいまや完全に払拭されたかにみえる。一方では帝政時代の「ブルジョア史

家」の成果が次ぎつぎに復刊され、その貢献がさまざまなかたちで論じられている。他方では、「ソ連史学」に對するきわめて手厳しい批判がはじまった。それは例えば中世史家の故コプリンの著作のように暗い時代の手記や苦しい出の公表という形をとったり、より痛烈に「ソ連史学」の担い手たちの方法と成果を批判するものまで様々である。こうした傾向は、恐らくは今後ますます盛んになるだろう。ロシア歴史学の行方にかかわるこうした問題をここで全体的に論ずる用意は筆者にはない。ただ一点だけ、いわゆる「亡命者史学」(Эмигрантская историография)をめぐる問題に簡単に言及しておこう。

筆者がモスクワに滞在していた一九九三年の秋口のころだが、時折訪れていた科学アカデミーの社会科学系総合図書館(ИНИОН)で「国外のロシア」(Русское зарубежье)という小さな展示会が開かれた。この図書館では蔵書のなかから一、二ヵ月に一度、特定のテーマで展示会を催しており、その一つというわけである。そこには革命後ロシアを追われたり、あるいは棄てた思想家、宗教学家、そして歴史家たちの著作が三百点ほど展示

されていた。そのなかに本稿でも言及したキゼヴェツルの著書『一つの世紀の狭間で。一八八一—一九一四年の思い出』(プラハ、一九二九)が書棚に並べられていた。かつて「ソヴェト権力の露骨な敵、観念論者にして科学における反動家」というあらゆる否定的レッテルを貼られた歴史家の禁貸出の本がそこに展示されているのである。改めてこの国の歴史学の様変りを実感させられたわけだが、少し注意して観察すると「亡命者史学」の研究はすでにかなり進んでいた。科学アカデミーのロシア史研究所には亡命歴史家を含めた「国外のロシア」研究グループがあり、九三年一月には研究集会がもたれている。「歴史の諸問題」誌にも「国外のロシアの歴史家」の欄が設けられ、またモスクワ大学歴史学部ではこのテーマで論文を書く若い研究者がすでに現われている。こうして「国外のロシア」の研究は、いまや一つの流行現象の観さえ呈しているのである。

だが何よりも筆者を驚かせたのは、当初こそ「亡命者史学」の本質を暴露し、その方法論を厳しく批判する、という意図でこの問題の研究をはじめながら、しだいにそこに多くの貴重なものを見出し、彼ら亡命ロシア人歴

史家(とその家族)の運命に共感を寄せていたソ連史家
がいたことである。一九九二年に出版された『ヨーロッパにおける亡命ロシア人歴史家』の著者で、すでにヘル
ストロイカ以前の一九八三年に亡くなったロシア中世史
家の故ヴェ・テ・バシュートである。彼はすでに一九五
〇年代にこの作業をはじめ、機会を得て亡命先で故人と
なった歴史家とその家族を訪ねることによって接触を重
ね、こうして「ソ連史学」と「亡命者史学」とを結ぶ仲
介者となったのである。著書には広い意味での封建制時
代を研究した歴史家≡亡命ロシア人約九〇名について、
その一人一人の著作目録が収められている。この大変に
困難な作業をバシュートはほとんど独力で——むろん未
完だが——なしたのだのである。「亡命者史学」もまた
ロシアの歴史学であり、そして大きくはロシアの文化遺
産を構成する貴重な一部分だ、という確信がバシュート
にはあった。併せて現在西欧諸国で開花しているロシア
史研究の担い手たちの多くが亡命ロシア人歴史家の教え
をうけた人々であることを想起する時、「亡命者史学」
の持つ意義を見すべしことはできないだろう。

〈参照文献〉

- Боголюбовский, М. М. Областная реформа Петра Великого. провинция 1719—27 гг. М., 1902
——, Земское самоуправление на русском севере XVII в. Зр. 1909—1912
——, Историография, мемуаристика, эпистолярия. М., 1987
Брачев, А. Д. 〈Дело〉 академика С. Ф. Платонова. Вопр. Ист. 1989 No 5
Вандалюковская, М. Г. П. Н. Милоков и А. А. Князевтер: история и политика. М., 1992
Горь, Ю. В. Замосковский край в XVII веке. М., 1906 2-ое. М., 1937
——, История областного управления в России от Петра I до Екатерины II. т. 1 М., 1913. т. 2 М.—Д., 1941
Иванова, Л. В. У истоков советской исторической наук. Подготовка кадров историк-марксистов в 1917—29 гг. М., 1968
Историческая наука в Московском университете 1934—84 М., 1984
Князевтер, А. А. Посадская община в России XVIII ст. М., 1903
——, На рубеже двух столетий. воспоминания 1881—1914. Прага, 1929
Кобрин, В. В. Кому ты опасен, историк? М., 1992

- Кривошеев, Ю. В. Дворянченко, А. Ю. Изгнание наук. Российская историография в 20-х - начале 30-х годов XX века. Отечественная история 1994 No 3
- Черкии истории исторической науки в СССР. т. IV М., 1966
- Пашуто, В. Т. Русские историки-эмигранты в Европе. М., 1992
- Покровский, М. Н. Избранные произведения. кн. 4 М., 1967
- Черепнин, Л. В. Академик Михаил Михайлович Богословский. Ист. зап. т.93 1974
- Шапиро, А. Л. Русская историография в период империализма. Л., 1962
- Эммонс, Т. Ключевский и его ученики. Вop. Ист. 1990 No 10
- Barber, J. Soviet Historian in Crisis 1928—32. Birmin-

- gham, 1981
- Emmons, T. (Translated, edited, and introduced) Time of Troubles. The Diary of Iurii Vladimirovich Goté. Princeton U. P., 1988
- Raeff, M. Russia Abroad. A Cultural History of Russian Emigration (1919—39). N. Y., 1990
- 末延三次『評伝サー・ホール・ヴィノグラドフ』、ヴィノグラドフ『法における常識』、末延・伊藤訳(岩波文庫、一九七二)
- 菊地昌典『字問の自由』とマルクス主義歴史家、『歴史学研究』二七〇号、一九六二年。同氏『歴史としてのスターリン時代』(盛田書店、一九六六)、所収。
- デイヴィス、R『ソレストロイカと歴史像の転換』富田武他訳(岩波書店、一九九〇)

(一橋大学教授)